

よしむら かたひろ
吉村高浩さん



プロフィール

32歳。豊玉町千尋藻出身、在住。豊玉高校卒業後、10年間福岡で介護福祉士として働く。体調を崩したことをきっかけに帰郷。長男であるため、父のイカ釣り船を継ぐことも考えたが、たたきイカを作る祖母の様子を見ながら加工に興味を持って育ったことから、いかの加工・販売の店「いか吉工房」を5年前に開業。2年前に自宅で始めた「漁家民泊」はお母さまの発案。惣菜店に勤めた経験のある奥さまも相まって、父がイカを釣り、息子が加工し、女性陣が料理しもてなす「家族ぐるみの漁師家庭の仕事スタイル」を発信している。祖父と両親、奥さまとの5人暮らし。大漁旗をなびかせた船が誇らしげにパレードを行っていた千尋藻港祭りの日にお話を伺いました。

この仕事を始めたのは？

福岡に出て初めて、いかに自分たちは対馬で贅沢な食生活の中にいたのかと気づかされました。「高いお金を払って食べるだけではなく、消費者の財布にもやさしくて、漁師にとっても損のない美味しいものを提供したい」と、今の漁業の現状の中で僕が地元でできる仕事は何かと考え、漁師と共に海と関わる仕事がしたいと思ったんです。

吉村さんの考えるこれからの漁師とは？

商品を売るだけでなく、こちらに人を呼んでパフォーマンスもしていかないといけないと思っています。漁師の「生」の姿を見てもらい、「漁師ってカッコいいね」って言われるように。漁師の皆さんと交わりながら、僕が考える漁師町スタイルや漁師へのスポットの当て方を提案したり話をする機会がどんどん増えていくといいですね。

具体的には？

いろいろあるんですが、例えば、対馬の漁師が休漁時期に対馬を飛び出して、漁師姿で店に立って、自分の獲ったイカを調理し、うんちくを語りながら接客もする「漁師の居酒屋」を

福岡あたりに出してみたいんです。料理はもちろんです。それを釣る漁師にもっと光を当てたいんですよ。他には、最近山ガールとか、釣りガールとか

何かに特化した趣味を楽しむ女性も多くなつたので、例えば釣り好きな女性を少数名の団体で対馬に呼んで、漁船に乗せて一緒に釣りをしたりバーベキューでもてなしたりして、一番得意な場所では釣り男をアピールできる「出会いの場」を作るとか、この地区をイカで地域おこしのモデル地区になれるようなことをやってみたいんです。父ちゃんが釣って、母ちゃんがあつかって、お嫁さんがパッケージして、というような、小さくてもできることをこの地区からやっていきたいですね。

そのためには交流が必要だと

そうですね。交流することで新しい発想が生まれる。僕は月に3日程度福岡に行商に行くんですが、そこで僕の発想を話したらいろんな可能性が見えてくるし、どんどん膨らんで進んでいく。それにいかに乗っけていくかという点も大事。今動ける少人数でもスピードに乗って動いて、自分たちの発信が波及

吉村さんの目指すところは？

家族ぐるみという長所を生かすこと、いろんな発信の仕方があるということ、みんなに知ってもらうこと、長いスパンでの戦略を想定しながら少しずつでも前に進むことでその夢が近くなるということを僕が示せたらと思います。そして、いろんな人と会って話をする中でアイデアや力をもらったりするから、僕が漁師と誰かをつなぐつなぎ手になればいいな、って思っています。

毎回、登場してくださった方に次の方をご紹介いただくこのコーナー。次回は豊玉町曾在住の梅野洋平さんです。お楽しみに。